

駅前総合病院移転を

土 浦

筑波大生 まちづくり提案

2019.2.18

「花火博物館」開設、駅前への総合病院移転、学校跡地で野菜工場。土浦市のまちづくりを若者目線で考え提案する発表会が、同市大和町の県南生涯学習センターで開かれ、筑波大生が聞き取り調査を経て計画案を取りまとめた。市が抱える課題を地区ごとに分析し、斬新な考えを提示した。

発表したのは、都市計画専攻の「都市計画マスタープラン実習」で学ぶ約40人の学生。各5〜6人の8班に分かれ、約3カ月にわたって行政や市民への聞き取り調査や分析を行った。人口・財政、交通・都市構

造、住環境など6分野の課題を分析した上で、まちづくりの計画を作った。

この日は「ここがいい。永く暮らせる街」「ぐっとグッとGOOD土浦」といった表題で図解や表作成の技術を駆使して発表した。



土浦のまちづくりについて発表する学生＝土浦市大和町

第2班の学生は、駅周辺や中心部に都市機能を集約する「コンパクトシティ」に異議を唱え、「市民が今の場所に住み続ける」ことを前提に計画を作った。旧小学校単位の18カ所それぞれ住民が運営する自立組織を設け、道路や公園の維持管理の優先順位を自ら決めることで市の財政削減に貢献する。既存施設を生かした活性化では、商業施設「モール505」にオープンカフェや生きがいサロンを開く案を出した。

第3班は、中心部に車の乗り入れを規制する「トランジットモール」とし、公共交通のほかは徒歩か自転車移動することで快適な環境を整備する案を提示。築年数の古い霞ヶ浦医療センターを駅前に移転する計

画も打ち出した。ほかに、モール505にコンピューターゲームで対戦する「eスポーツ」のセンターを設置する案や、「花火博物館」の開設、閉校した学校で野菜工場を稼働する案もあった。中川清市長は「若い人による夢のある提言は心強い。生かせるものを生かしていきたい」と語った。

(綿引正雄)